

先日の地名講座で「江戸の坂」の話があった。かねがね東京の街を歩いていて坂が多い事は承知していたが、800以上の坂があると聞いて改めてその多さに感じ入った次第である。又、坂の名にも色々と命名の根拠がある事を改めて確認する事が出来た。

講話の中で「岩の坂」の話も面白かった。以前巢鴨から板橋本町まで旧中山道を歩いたことがあったが、その時は「縁切榎」だけを見て「岩の坂」には気付かぬまま歩いたようである。

ところでこの時頂いた坂名一覧表の中で先程の「岩の坂」の少し前に「芋洗坂」「一口坂」が載っている。

「一口」は「イモアライ」と読む。この名前の地名が京都久世郡久御山町にあり、難読地名の一つとして有名である。「イモ」は芋ではなく天然痘（疱瘡）のことで、この一口の地に疱瘡の神「一口稻荷」がある。（室町時代の頃から疱瘡は「いも」とか「いもやみ」と呼ばれていた。）

そして東京の「一口坂」はこの京都の「一口稻荷」に由来しているのである。

既にご存知の方も多いとは思いますが聞きかじった事、調べた事をここに紹介して見たい。

JRお茶ノ水駅の聖橋口を出て左折すると淡路坂がある。聖橋の南側を総武線に沿って秋葉原の方を下る坂である。坂の入口の所に千代田区の坂名案内

の看板が立っている。「かつて鈴木淡路の守の屋敷があったため淡路坂と呼んだが、相生坂・大坂・一口坂とも呼ばれていた。」と書いてある。案内板の反対側の道路脇の樹木(棕の木)に「太田姫神社元宮 旧名一口神社」と書いた木札と神札が貼ってある。この一口神社が先述の京都一口にある「一口稲荷神社」と深い縁があるのである。

室町時代の末頃関東一帯に天然痘が蔓延し、太田道灌の姫もその病に罹ってしまった。天然痘は当時死の病と云われていたが、心痛の道灌は京都山城国にある一口稲荷神社が靈験ありと聞き、平癒を祈願した結果姫は無事全快した。喜んだ道灌は江戸城を築く時「一口稲荷」を勧請し「太田姫稲荷神社」として城内に祀った。その後徳川家康が江戸城に入った時現在の錦町に社を移し、更に江戸城増改築の時聖橋の袂に遷座した。この時からこの坂を「一口坂」とも呼ぶ様になったのである。聖橋下流の昌平橋を「一口橋」と呼んでいた時代もあった。

尚太田姫稲荷神社は昭和六年の総武線開通工事の時に現在の駿河台に移されているが、今でも地元の氏神様として崇められている。蛇足ながら神社の紋は太田道灌の家紋である「太田桔梗」である。

何故一口をイモアライと呼ぶかについては色々な説があるが、その一つ『もともとこの地区は三方を川に囲まれ、出入り口が一ヶ所しかないため「一口」と云う字が当てられるようになった。一方村の入り口にいも(病気)の進入を防ぐため神様を祀り「あらう」(祈る)ということから「一口」を「イモアラ

イ」と呼ぶようになった。』との説が有力である。尚参考までに一口の地は宇治川沿いの左岸にあり対岸には京都競馬場がある。すぐ先の下流で桂川と合流し淀川になる。現在は「東一口」と「西一口」の2地区に分かれており、一口稲荷（別名豊吉稲荷）は東一口集落にある。

九段靖国神社の脇の靖国通りを市ヶ谷の方に行くと外濠に下る坂がありここにも坂名の案内板が立っている。「一口（ヒトクチ）坂は嘗てイモアライサカと呼んだ」と説明されており、現在の坂の呼称はヒトクチである。交通標識板にも一口坂（H i t o k u t i z a k a）と書いてある。尚ここでは稲荷社がどこにあったのか不明である。

六本木近くの「芋洗坂」は芋問屋があったとか芋の市が立ったのが坂名の由来と云われるが、実態は一口をイモアライと呼ぶのが難しいので芋洗と表現を変えたのではなかろうか。

話は変わるが船橋にも「疱瘡神」を祀った石祠があちこちに存在している。殆んど神社の境内にあるが、私の住んでいる大穴周辺では大穴南4丁目の林の中に「疱瘡神・稲荷神社」と彫った小さな石祠がある。又大穴北5丁目の道路脇梨畑の側には何も彫ってない石祠がある。地元の人には「あんば様」と呼んでおり、これは茨城の大杉神社に縁のある疱瘡の神様である。

これについては話が長くなるので後日に譲ることにしたい。